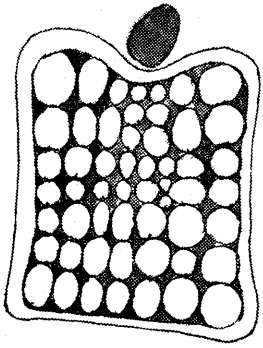
保育の実践と理論を求めて

――インドの旅①――

津守　真



十一月二十五日から一週間、インドのバローダ大学で、世界幼児教育機構（ＯＭＥＤ）のアジア域ワークショップが行われた。日本から、大戸美也子さんと私がこれに出席した。

この体験をどのように表現したらよいのだろう。自動車の通る道路の両わきに、泥と古布で囲った、家とは云い難い住居のまわりに、破れた衣服をまとった人々が溢れている。大人も子どもも無表情で、埃と大気の汚染にまみれている。ボンベイの街に到着したときも、ボンベイから北に飛行機で四十五分のグジャラート州バローダ市に着いたときも、否応なしに目に入るのは、この極度の貧困の中にある人々である。そのわきを通らなけれ

ば、どこにもゆけない。

保育者養成を主題とする会議の行われたバローダ大学のキャンパスは、緑の芝生とねむの木の大木に囲まれた快適な環境である。主催校である家政学部の児童発達学科は、お茶大とよく似た規模である。私共、アジアの諸国からの出席者には、学生や院生が付添って、行き届いた案内をしてくれる。この人たちは、街で見る子どもたちとは全く別世界の人々のように、近代的で、知的で、美貌である。インド各地で仕事をする幼児保育の指導者たちは、三十代、四十代の教育を受けた知的な婦人たちである。朝になると毎日、違う色柄のサリーを身にまとって現われる。彼女らは精力的に討議し、まとめてゆく。朝、八時半から始まり、お茶の時間、食事の時間をいれながら、夜九時すぎまでプログラムがつづく。外見は異国的であるけれども、議論していると、それぞれの人の顔が、日本で知っているあの人、この人と重なってくる。インドで会議をしているのを忘れることがしばしばであった。

それにしても、街で見る極度に貧困な人々とのコントラストは、どう考えたらよいのだろうか。

インドの幼児保育指導者たちがしようとしていることは何か。

今回の会議のために、あらかじめ送られてきた部厚いワーキングペーパーには、第一に現代における幼児保育施設の性格について次のように述べられている。

「多くの可能性をもつけれども傷つき易い幼児は、古来、大人たちの関心の的であった。記憶にはない時代から、家族という基本的社会制度が、幼い子どもの care and education——養護と教育すなわち保育——に当ってきた。現代でも、家族はこの点で主要な責任を負うが、社会変化の諸要因が、この仕事を複雑化するに至った。すなわち、社会—政治—経済諸要因、婦人の就労等である。それと同時に、子どもは、人間性（humanity）の最も貴重な資源であるという認識もまた普遍的となった。その結果、子どものニードにこたえるための諸保育施設が生れ、家族以外の制度がつくられるに至った。」(Working Paper: Training Personnel for Early Childhood Care and Education, Prepared by Department of Child Development, Faculty of Home Ecnomics, Baroda University, India, p. 1)

第二に述べられていることは、養護と教育は不可分の一体であり、とくに発展途上国においては、それは発展の過程にあることについてである。

「……それにもかかわらず、幼児の care and education (ecce)、すなわち保育の現状は満足すべき適切な状態とは云いがたい。とくに発展途上国においてそうである。ecce はなお発展の過程にある。発展途上国の子どもたちの生活条件にわれわれは十分に気付いているであろうか。子どもたちのニードは、政府によって適切に顧慮されているであろうか。」(op. cit. p. 2)

ここで引用されている数字は、現実を想像すると驚くべきである。中国を除く発展途上国の人口の四十五パーセント、すなわち十億人が十五才以下の子どもである。

0－6才の幼児は、人口の二十二パーセントである。6才以下の幼児の中、三億人が清潔な水を得られず、一億人が栄養失調である。

第三に、栄養と健康の向上はまずなされなければならないが、人間の育成あるいは教育の機能は同時に伴う。インド各地における諸保育施設の試みを挙げて後、次のように述べている。

「子どもは未来の市民として用意される人間資源であることの認識は必要もあるが、それ以上に、子ども自身としての現在が重要である。幼児保育のプログラムは、小学校一年生に備えて、読むこと、書くこと、算えることを促進させるためということに目標を限ることはできない。もっと重要なことは、子どもを、人間的尊厳と、自己としての価値をもつ個人 (an individual with dignity and self worth) として見ることである。」(op. cit. p. 10)

第四に、親と地域社会の理解と協力が強調される。

「子どものための保育施設の計画は、両親が子どものニードについて理解するときにのみ、真の意味で子ども中心となる。全コミュニティが、子どものニードについて確認するときに、親とコミュニティは、そのときに保育施設の好意的なパートナーとなり、時間と労力と財力を提供してくれるであろう。実際、子どもの養護と教育の統合施設は、分離した別個の制度で考えられるべきでなく、親とコミュニティから離れては存在しない。ecce の概念の実践は、コミュニティの中で、コミュニティによってのみ可能となる。」(op. cit. p. 10)

このような保育施設で働らく人々の養成を考えるとき大きく分けて、専門職と準専門職とを考えることができる。このワーキングペーパーによれば、次のように分類される。

A　専門職

(1)　Grass root workers 草の根の保育者、すなわち、現場の保育者

(2)　Supervisors 指導主事

(3)　Administrators 行政管督者

(4) Trainers　養成担当者，すなわち，教員養成大学の指導者を含む。

B　準専門職

(1) Community workers　地域の人の協力者，給食担当者等

(2) Family members　両親など

(3) Youth volunteers　青年や学生のボランティア

これらの人々が，子どもまたは保育事業に接する場合の，知識，技能，態度としては，いかなることが要求されるか，それを養成するのには，どの位の期間，どのような内容のことが必要であるかということが検討されねばならない。(op. cit. p. 27)

それは次のように分類される。

(1) pre-service professional training　現職につく以前の専門的実習の問題

(2) on the job pre-service training　養成学校における実習の問題

(3) on the job training　現職にあって受ける訓練

(4) in-service refresher course　現職者の再教育のコース　(op. cit. p. 27)

そして，最後に，討論の中心には，子どもたちのために，人間的観点からの反省が，常になければならないことが強調される。

会議

このようなワーキングペーパーを前提として会議が始まった。

まず第一に気付かされたことは，日本の幼児教育及び幼児保育の現状と，インドとの間の大きな相異点である。私が，日本では幼稚園や保育所が普及し，幼児数が減少しているために，数から云うならば必要は充たされていること，資格のある教師が就職できなくて余っていることを話すと，それは本当かという質問が返ってくる。余りにも多くの子どもが保育を必要としているのに，保育施設も，はたらき手も，あまりにも少ないのがインドの現状である。

この会議に集まったインドの保育指導者たちは、この子どもたちの必要とすることに、どうしたらこたえられるかを真剣に考えている。この子どもたちの保育を通して、インドの社会を向上させる仕事と取り組んでいる。指導者の婦人たちは、中流以上の、むしろ上流の階層に属する人たちと見受けたが、幼児の仕事を通して、最底の生活をしている人々を引上げることに献身的にはたらいている人々である。制度として整っていないだけに、子どもたちが必要としていることに正面から取り組む姿勢には、頭の下がる思いのすることがしばしばであった。

アジアの諸国が、羨みと一抹の軽侮の念をもって見ている日本の社会は、物質的に富んでおり、制度はととのいすぎる程である。しかし、教師になるということが、単に「就職」して自分の身分を確立することしか意味しないことがある日本の現状、また、上から定められたことをしていればよいという教師の役割についての認識、それだけでは、教育が、子どもと社会の真の要求にこたえることができないだろう。インドの指導者たちと討論しながら、素朴さを失いかけている日本の教育の現実を考えた。

インドの幼児保育の実状を直接に見聞することができたのは、会議の最後の日に案内された農村地域のコミュニティ・インテグレーション・センターと、帰路、ボンベイで立ち寄った、ウダイチャル学校の幼稚園であった。

農村スクラムのコミュニティ・インテグレーション・センター

会議の最后の日に、私共は、バローダから車で2時間ほどの距離にある農村地域に案内された。自動車道路の両側には、どこまでいっても、土と布で囲ったすみかが延々とつづく。裸の子どもたちが、埃にまみれて立っている。漸く到着したチュタ・ウダイフウという町には、この辺には珍らしく石造りの古典的な建物がいくつか建っ

ていた。最初に案内されたのは、二階建の粗末なコンクリートの建物で、約三十名程の二十才前後の女性のグラスルートワーカーたちの養成をしていた。この婦人たちは、この地域の農村スラムの子どもたちを直接世話する人として、半年から一年の訓練を受ける。この多くの時間が、栄養と健康と疾病のことに費やされる。それに加えて保育の訓練がなされる。白いサリーをまとった看護婦の指導者たちが、誇らしげに案内してくれた。一歩建物の外に出ると、この地域の中心である小さな町にも、難民のような姿の貧しい人々が溢れている。

その町の中心から車で十五分程走ったところの小さな学校風の建物に、スーパーインテンデントのオフィスのある建物があった。深い緑のサリーを着たその小柄な婦人は、その地域に三〇〇の就学前施設があり、十七人のスーパーインテンデントが担当していることを話してくれた。この婦人は、毎月十八日にこの場所にくるのだという。そこから少し離れたところに、ヘルスセンターがあった。約十五年前に建てられたこの診療所には、予防接種、健康診断、外科手術室、家族計画相談室が並んでいた。建物の前には、子どもを抱いた母親、赤ん坊を布に包んでハンモックのように木の間にかけて揺らす父親などが、たむろしていた。三十代半ばの男性の医師は、グジャラート語、ヒンヅー語、英語のいずれで話したらよいかと尋ねて後、午前中に部落を巡回したので質問に答えるだけにしてほしいと憔悴した面持で十分間ほど話してくれた。

そして、この日の小旅行で、最后に立寄ったのが、就学前の子どものためのコミュニティ・プロヂェクトであった。

それはどこにあるのかと目を疑うような場所であった。最初は、バスの停留所かと思ったほどだった。二〇人程の子どもたちが輪になって坐すと一杯になる石畳の上に、屋根がさしかけてあり、続いた小さな部屋か倉庫になっていた。ひとりの婦人が子どもたちの中に立って、何かをしゃべっていた。私達が子どもの傍にいっても、体を動かしもせず、表情もかえない。案内役の私共

の婦人指導者の一人が、美しいサリー姿で子どもたちの輪の中に坐り、手振りを交えて歌うと、何人かの子どものロが少し動いた。世話役の大学院生が、埃にまみれた子どもたちの傍に腰を下して、その場を陽気にした。それでも大部分の子どもたちは、身動きもせず、笑いもしない。

私も、その輪の中に腰をおろした。ひとりの子どもが大きな目で、しっかりとみつめるが、笑うことをしない。

大学院の学生が、この子たちの多くは、小学校にもゆかないのだと話してくれた。四才と五才の何人かの子どもは、赤ん坊を抱いてその輪の中にいた。その学生は、子どもたちは大人と見ると注射や痛いことをする人と思っているのだと説明してくれた。その日、バローダ大学にもどってから、ヴァルマ教授に、この子どもたちはモーションレスmotionlessでエモーションレスemotionlessなのは何故かとたずねると、それは栄養失調のためだと即座に答えた。後にボンベイで私を案内してくれたチョ

リシー先生に同じことをたずねると、家族の中でも子どもは、命令と否定の中で生活し、部落の他の大人たちからも同様に扱われているからだと云った。私はそのどれもが当っているように思った。極度の栄養不足のために、活力も出ないのだろう。そして、大人との温い触れ合いを体験したこともないのだろう。夏になると熱風の中に無表情に立つこの子どもたちは、一体、どのような気持で毎日を過しているのだろうか。

幼児保育施設にきている子どもたちの多くは、学令になっても、小学校にもゆかないという。しかし、その子どもたちにも、幼児期の保育は人間形成の基礎として重要であると考えて、保育指導者たちは保育施設の普及に努力している。グラスルーツワーカーという語は、このような地域の最前線で働らく保育者を考えるときに、ぴったりとあてはまることばである。その人々を養成するのには、三ヵ月でよいか、あるいは六ヵ月が必要かというのが、保育者養成の論議である。その養成の内容は、午前は子どもと過し、午后は講義及び討論、夜は地域の親たちを集めて懇談するという工合である。

インドの貧困地域の子どもたちの草の根としての保育者を養成すること、その指導者としてのスーパーインテンデントを養成すること、その両者の養成に従事する人を養成すること、教育を受けた保育指導者たちの仕事は限りなくある。極度の貧困の中にある子どもたちが至るところに溢れていることに衝撃を受けると共に、その子どもたちの保育を通して、地域社会の向上のために尽力している婦人たちの姿に、私は印象づけられた。

（愛育養護学校）